

# SDGs達成に「家族農業」が不可欠と 国連総会が認める意味

—家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン代表・村上真平—

2019年5月27～29日、国連の「家族農業の10年」の開始式がイタリア・ローマにある国連食糧農業機関（FAO）本部で行われた。冒頭のあいさつに立ったホセ・グラシアノ・ダ・シルバFAO事務局長は次のような言葉で話しはじめた。

「私たちは14年の国際年が『家族農業』となったときに、はじめて家族農業者という最も適切な『名前』でその人々の存在を呼ぶことができるようになった。家族農業者こそが『世界の80%の食べ物を作っている』人々であり、生物多様性など『環境を守っている人々』であり、『地域の文化、経済を支えている人々』であるという事実を、世界の人々に知らせることができた。国連総会が28年までを『家族農業の10年』としたことで、彼らの存在と役割が持続可能な開発目標（SDGs）を30年に達成するために欠くことのできない人々であることを宣言した」

14年の国際家族農業年が国際レベルの農業関係者に対して及ぼした大きな影響を一言で言うならば、「パラダイムシフト」だ。いま、世界では「在るべき農業」の常識が変わってきている。

## ◇生産性が高い家族農業

農業統計をみると、「単位面積当たり、1作物の生産量」という従来の指標では伝統的家族農業より近代農業の方が多くなっている。しかし、「単位面積当たり、1年間の全作物の生産量」というもう一つ指標で見ると、伝統的な農法で家族労働による多様な作物、家畜を育てる家族農業の方が、大型機械を駆使し、農薬化学肥料を多量に使う大規模な企業農業に比べて生産量が高い。調査研究によっては150～400%の増収になる。それを検証するために、日本の「近代稲作」と「伝統農法の稲作」を例に挙げ、二つの指標を使って、比較してみたい。

近代稲作は、春に田んぼに化学肥料をまき、耕し、代掻きをして田植えをする。その後の管理は、除草剤で草を枯らし、殺虫剤や殺菌剤で病虫害駆除をして秋に刈り取り出荷する。その後、田んぼを耕して、稲わらなどを混ぜ、次の春を待つ。ほとんどの農家が一年に1作だ。収穫物はコメ、収量は平地と山間地を平均すれば10アール当たり8俵（玄米で480キログラム）ほどだ。この場合、収量はどちらの指標でも480キログラムになる。

一方、伝統的農法では、春に緑肥、堆肥をまいて耕し、代掻きをして田植えをする。畝に枝豆やみそのための大豆を植えて、時にはコイやアイガモなどを水田で育て、同時に草や虫を捕ってもらう。稲と大豆を収穫したら、コイやアイガモなどは食用になる。その後、大麦を植えて、春の田植え前に収穫する。収穫物は10アール当たりコメ6俵（360キログラム）ほど、大麦が250キログラムほど、それに大豆15キログラム、そして、コイやアイガモなどが収穫にプラスされる。

しかし、従来の指標を使った場合、コメの生産量は360キログラムとなり、近代稲作の収量より、120キログラム少なく、生産性が低いことになる。ところが、もう一つの指標で計ると、コメ、大麦、大豆を足した穀物の量



村上 真平（むらかみ しんぺい）

1959年福島県生まれ。バングラデシュやタイで非政府組織（NGO）を通じて自然農業の普及と持続可能な農村開発の活動に関わる。2002年に帰国し、福島県飯館村に入植。原発事故後に避難し、13年三重県津市の池の高原で自然農園「なな色の空」を再開した。2014～16年アジア・ファーマーズ・アソシエーション（AFA）議長、15年から全国愛農会会長、19年から家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン代表。

は625キログラムになり、近代稲作の収量より145キログラム多い。それに、コイやアイガモなどが加わるので当然、伝統農業の食べ物の生産量のほうが近代農業の生産量より多い。

これからの地球を考える時、人口が増加するにもかかわらず、自然の森を農地に転換して農地を拡大することは地球環境の観点から難しくなっている。その意味で、未来の農業に求められるものは限られた土地の利用率を高め、環境を壊さない持続可能な方法によって農業生産を増やすことだ。

伝統的家族農業はそれを世界中で行っている。

### ◇生物多様性、環境を守り、CO<sub>2</sub>を出さない

伝統的家族農業は環境を汚染し、生態系を乱す農薬や化学肥料をほとんど使わない。また、多様な作物と小家畜を有する経営であり、農業に必要な、種、肥料、耕耘を自分たちでまかなっている。

近年、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）による温暖化を防ぐために、農業のエネルギー効率性が大切な指標になっている。この指標は石油、石炭などの化石エネルギーを使わないほど、エネルギー効率性が高くなる。近代農業においては、トラクター、田植え機、コンバイン、コメ乾燥機など全て化石エネルギーを消費する。機械や設備を作るためにも、窒素などの化学肥料を作るためにも膨大な化石エネルギーを消費する。生産物1カロリーの生産に10カロリー以上の化石エネルギーが使われている。つまり、エネルギー効率性は10分の1だ。このエネルギー効率性の低さが「農業・食糧産業が全CO<sub>2</sub>排出量の30%を占めている」と言われるゆえんである。

一方、ほとんどの作業を手や動物で行い、肥料は草や稲わらなどで作る堆肥を使う伝統的農業においては、生産物1カロリーの生産に1カロリーの化石エネルギーも使っていない。仮に、化石エネルギー1カロリー使ったとしても、10カロリー以上も使う近代農業の10倍の効率性だ。その上、伝統農法は堆肥や緑肥による土壌炭素（腐植）の供給により、空気中のCO<sub>2</sub>を土に貯留するためCO<sub>2</sub>を削減している。

### ◇地域の文化を守り、地域の経済を支える

家族農業を営む人々は地域に住み、流域生態系の中で自然の恵みを受けて生活をし、共同作業で道路や水路の整備をして地域の環境と文化を守ってきた。日本でも里山が農村の主な形態であった頃、地域の経済は里山農業が担っていた。利益追求が第一義の企業農業は利益が出ないとき田畑を放置して移動する。地域を守るという視点がない。

現在、農山村の家族農業の担い手不足により、限界集落という社会問題と、耕作地、植林地放棄という環境問題が起こっている。家族農業者がそこで農業を営むことによって、結果的に果たしてきた持続的な国土保全、保水機能が失われようとしている。国連の家族農業の10年が国連加盟国全てに求めていることは家族農業者がその地域で生きて行ける政策の実施である。

### ◇SDGsを達成するアグロエコロジーへの転換

国連は15年にSDGsを定め、30年に達成すると宣言した。これは、世界中で平和で持続可能な社会を実現するために、私たち人間の日々の生活、仕事において「環境的に健全であり、社会的に公正であり、経済的に公平な行動をしよう」というものだ。

そして、農業においてSDGsを実践するために国連の「家族農業の10年」で勧めている農業が、伝統的な家族農業が行ってきた環境と地域と生命を守り、気候変動を緩和できるアグロエコロジーなのだ。アグロエコロジーとは伝統農業、森林農業、生物多様性の有機農業などを指し、世界の多くの国や地域の農業政策、特に欧州連合（EU）で転換が始まっている。日本においては、まだ大きな潮流とはなっていないが、家族農業の10年を転機として理解と実践が広がることを期待されている。



アグロエコロジーのオーガニックで多様性をベースにしたガーデン